

知られざる大崎の歩みを訪ねて。【人物列伝編②】 小誌「新鮮大崎」が伝えたキラ星のOSAKIひと物語

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA（原風景）を訪ねる『おさき今昔物語』。

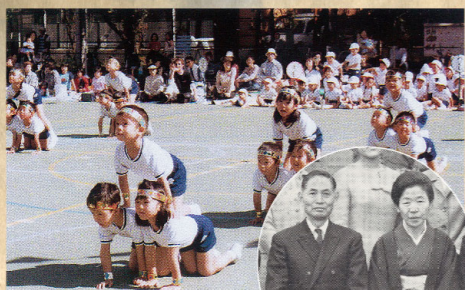
前号に続く第三十四話は、郷土の歴史に名を残して輝く人々の記録。そこには、その功績を日本史に刻んだ偉人から、郷土発展の牽引者まで、大崎の文化的土壌の豊かさを証した多くの人々の存在がありました。かつて小誌に登場した大崎の賢人たち。ここにまた、キラ星の人物列伝としてご紹介します。



副都心として目覚ましい発展を遂げていくその土壌に、多くの歴史ストーリーが存在した私たちのまち大崎。この発展への歩みの中で、様々な輝きを見せて存在した人々の記録をこれまでお伝えしてきました。ここに紹介できなかった大崎の先達たちの足跡もまた、いずれかの機会にご紹介できればと願っています。

「大崎の心のふるさと」「大崎幼稚園」創設の「父と母」

寺井政次・寺井ミヨ 夫妻



裸足で相撲をとっても大丈夫な、大崎幼稚園（写真下）の土の園庭で練習してきた組体操。本番は芳水小学校の校庭で（平成15年頃）。園内写真は昭和43年当時のご夫妻

次代を担う芽を育み、大崎の人々の成長を見守り続けた「大崎幼稚園」の生みの親。終戦後の焼け野原を走り回る子供達の姿を見て、「自分たちの幼稚園をと願う地元の人々の想いに応えた創設者夫妻の献身の成果は、今なお「大崎の心のふるさと」として生き続けています。

「人生に必要な知恵は、すべて幼稚園の砂場から学んだ」。幼稚園教育の大切さを論じた哲学者の言葉通り、大崎幼稚園には、長い人生の土台を育てるために必要な場が守り続けられています。地域密着の手作り保育や、貴重な自然環境の中でのふれあひも、創設者夫妻の優しさの賜物「困ったときはいつでも話しいらっしゃい」との「大崎の母」寺井ミヨ氏の言葉がこれを証しています。

VOL.33号より

信用金庫の使命を追求、「地域の幸福」を支え続けた

小原鐵五郎



▲第三代理事長として尽力した城南信用金庫本店（昭和60年）

昭和62年、全国信用金庫協会名誉会長就任と同時に、勲一等瑞宝章をも授賞

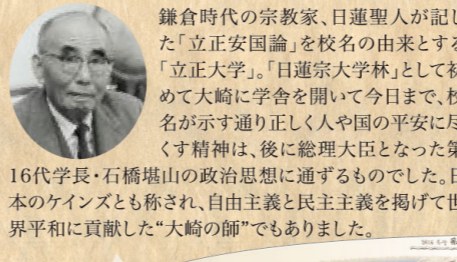
大崎の地域経済を支える「城南信用金庫」の牽引者として、貧富の差のない安定した社会と中小企業の発展に生涯をかけた、昭和の賢人。

中小企業の保護、育成と地域の繁栄に向けて、公共的金融機関としての使命を追求。不健全な投機的融資を排した「貸すも親切、貸さぬも親切」の鉄則を貫いた「小原哲学」の体現者でした。

VOL.27号より

大崎のまちのキャンパス、「立正大学」16代学長

石橋湛山



鎌倉時代の宗教家、日蓮聖人が記した「立正安国論」を校名の由来とする「立正大学」。「日蓮宗大学林」として初めて大崎に学舎を開いて今日まで、校名が示す通り正しく人や国の平安に尽くす精神は、後に総理大臣となった第16代学長・石橋湛山の政治思想に通ずるものでした。日本のケインズとも称され、自由主義と民主主義を掲げて世界平和に貢献した「大崎の師」でもありました。



「日蓮宗大学林」として 大崎に誕生した立正大学。その歴史の一時期を、大崎と歩んだ「平和の引率者」。

VOL.36号より

「優しさと緑の福祉事業」「トット文化館」を創設

黒柳徹子氏



「トット文化館」農園での野菜栽培を通して、地元の方々への新鮮な手作り野菜の公開販売も実施しました。

1981年に出版され、「大ベストセラー」となった「窓際のトットちゃん」。黒柳徹子氏による、この著名な執筆本の発行と著作権譲渡による基金に基づき、昭和62年、大崎のまちに「トット文化館」が誕生したのでした。

「トット文化館」では、就労継続支援施設として、主に聴覚障害者の方々への自立に向けて、様々な作業訓練を行っています。また、「トット文化館」の運営元「トット基金」では、黒柳氏が牽引役となり、ろう者劇団の芸術活動にも注力。氏の福祉活動への深い理解とリーダーシップが、大崎のまちにキラ星のように優しい輝きをもたらししています。

VOL.32号より

